

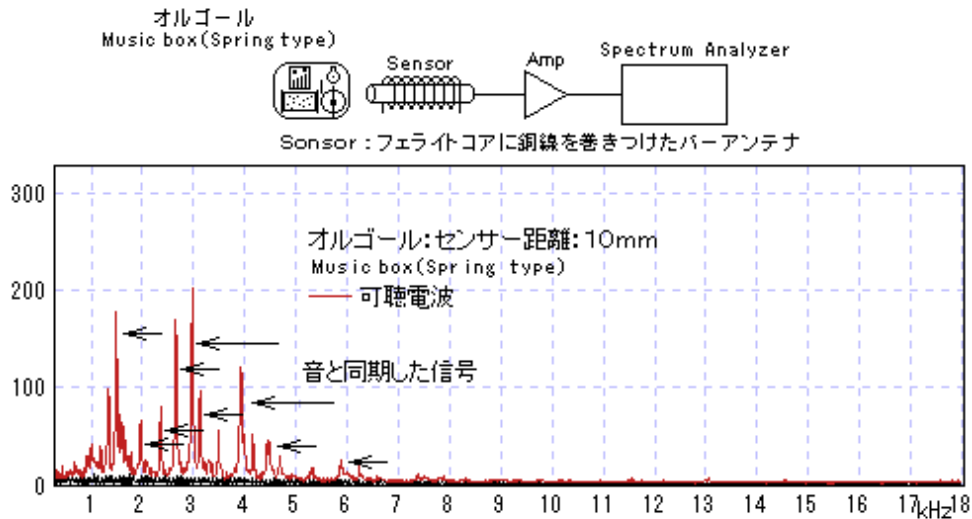
# UST とは

慶応大学環境情報学部、武藤教授はストレスを加えたフィルムにオルゴールを押し当て、これから発生する音を「可聴電波」といい、200m先でも聴きとることができ、エコールームでも音速レベルでなく光速レベルの電波であることによりエコーは発生しない。武藤教授より実際にその体験を受けました。このヒントを元に下記の実験をした結果、UST効果は「可聴電波」である可能性が出てきました。UST本体からは全く音を聴きとることはできませんが、USTを移動すると音源からの音が、そのUSTに纏わりつく傾向があり、UST側に引っ張られる感覚があります。まだ漠然としてですが、これらの実験から推測し、USTの効果は「可聴電波」と捉えても間違いではないでしょうか。これを用い音場のコントロールが可能となります。可聴電波を発振するUSTと従来の音源との関係は以下のようなイメージと想像します。

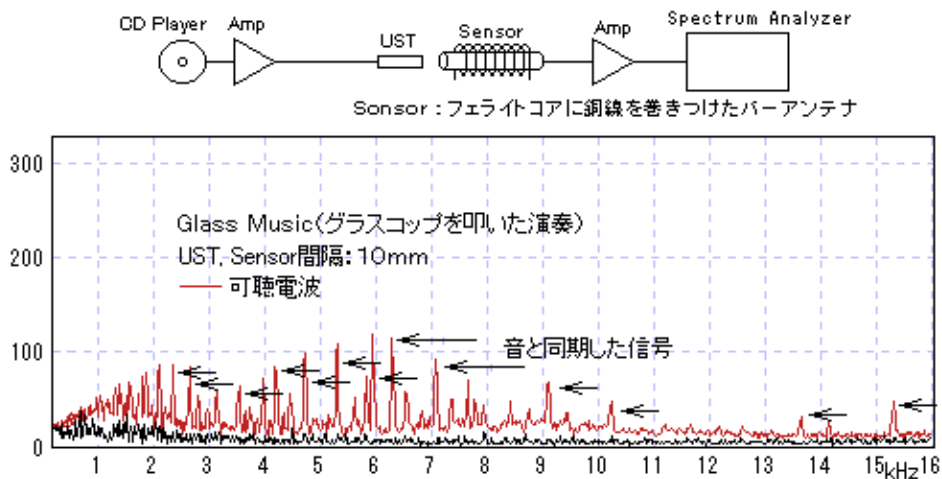


音源は振動板とUSTです。USTより発生した可聴電波が第1波として人の知覚を刺激し、次に振動板から発生した音波が第2波として鼓膜を刺激します。この2つの可聴電波と音波が相乗し、たくさんの情報が人に届き、より鮮明に臨場感、リズム感を感じとることができると考えます。結果、より音楽を楽しむことができます。

可聴電波の発振源はオルゴールです。武藤教授は、そのオルゴールから電波がでるといいます。その電波を受信し、その音と同期した信号を確認しました。また、その不思議な音も聴くことができました。



上記と同じ手法を用いU S Tの信号を観測してみました。オルゴールと同じく電波を確認することができました。音としても聴きとることができました。



現時点ではU S Tの真の実態を証明することはできませんが、武藤教授のいう「可聴電波」という可能性ができました。とすれば波動伝播ですから、音速レベルでなく、光速レベルでこれを判断する必要がでてきます。これが正しいとすれば人は光速レベルでの変化を感じとる能力を持ち備えていることとなります。もしかして第6感、気配、殺気等々はこれかもしれません。これらの効果を更なる視覚化、数値化するにはまだ先になりそうです。